

英彦山登山を音声案内 町内イベント盛り上げ

スマホアプリで添田町活性

「英彦山登山を音声案内でサポート」「誰でも簡単に町内情報を発信」。情報通信技術（ICT）を使った添田町の地域活性化策を近隣の学生が研究する「添田町ICTオープンスクール」の成果報告会が町役場で2日にあり、学生が考案したスマートフォン用アプリ（応用ソフト）の活用策を発表した。



添田町ICTオープンスクールの報告会

スマートフォンアプリのアイデアなどを大学生が発表した。スクールには近畿大産業理工学部（飯塚市）、九州工業大情報工学部（同）、同大工学部（北九州市）から希望した12人が参加。三つの混成グループに分かれ、昨年11月から町内で調査を重ねて案を練った。「英彦山ハーフェクトマニユアル」と題したアプリは、スマホの衛星利用測位システム（GPS）を生かし、登山道を音声案内する。町のシンボルである英彦山を登山初心者や若者が楽しめるようにして観光客を増やす狙いだ。学生たちは英彦山に登り「感動を誰かと分かち合いたい」と感じたといい、登山者が投稿した写真にアプリ利用者がコメントできる機能も付けた。

スマホを使って誰もが町

ICTオープンスクール 大学生12人が成果発表

内情報を発信できるアプリを考えたグループは「回覧板や町広報紙だけでは情報量が限られる」と指摘。催しやサークルに参加しやすいよう、行政や住民が自由に告知を書き込み、質問もできる掲示板機能を持たせた。無料通信アプリ「LINE」で若者を集め、町内の自然散策で交流を深める企画の提案もあった。

発表を聞いた寺西明男町長や町職員からは「アプリは誰が管理するのか」「開発費用はどれくらいか」など、導入を想定した具体的な質問も出た。九州工業大工学部4年の古里亘さん(22)は「専門知識をどんな形で生かせるか考え、研究室内では得られない貴重な経験ができた」と話した。

スクールは、町と九州テレコム振興センター（熊本市）でつくる添田町情報化推進勉強会が、町内のインターネット活用を促進しようと2012年度から開催し、3回目だった。

（諏訪部真）